

## テサロニケ人への手紙 # 7

### 「福音を宣べ伝える者の姿勢（2）」 | テサロニケ人への手紙 2章 7～16節

2020.09.3

#### はじめに

今回は1テサロニケ2章に入り、「福音を伝える者の姿勢(1)」というタイトルでお語りしました。その内容は、パウロがテサロニケでどのような姿勢で福音宣教を行ったのかということでした。マケドニアに渡りピリピでの迫害、投獄の中にあっても、祈りの中で神に勇気づけられ宣教したこと、また彼がもっていた福音宣教への純粋な動機についても学びました。パウロは私利私欲のためにではなく、キリストの愛によって人々に宣教しました。今回はパウロの具体的な宣教スタイルを見ていきましょう。そして福音を聞いたテサロニケの人たちの2つのグループの反応についても御言葉から教えられたいと考えています。

#### 1. 福音を伝える者の姿勢（2）

##### ①母親のように

**【2:7 キリストの使徒として権威を主張することもできましたが、あなたがたの間では幼子になりました。私たちは、自分の子どもたちを養い育てる母親のように、  
2:8 あなたがたをいとおしく思い、神の福音だけではなく、自分自身のいのちまで、喜んであなたがたに与えたいと思っています。あなたがたが私たちの愛する者となったからです。】**

パウロはテサロニケのような誤解されやすい環境の中、「使徒としての権威」を主張しませんでした。それは他の哲学者や宗教家の教えと神の福音は全く違うことを、人々に明らかにするためでした。

「あなたがたの間では幼子になりました。」この箇所は二通りの解釈があります。一つは幼子になるとは優しくするという意味です。二つ目は母親が子どもの目線まで降りて、子どもに理解できるように話すことです。どちらにしても、ここでパウロは自分の子どもたちを養い育てる母親のような愛情深さ、優しい態度で彼らと接しました。これはパウロという人物の一つの面であるということが出来ます。

彼の愛情は「自分自身のいのちまで、喜んであなたがたに与えたいと思っています。」というほどでした。

**【15:13 人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。】**

新約聖書を読んでいますとパウロは、福音のためには、厳しく、鋭く、冷たい人物のような印象さえを受けることがあります。実際には彼の心は神への燃えるような愛、福音の純粋さを主張したのであって、神への燃える愛は、同時に、人々への燃える愛となって発露したのです。このパウロの自己犠牲を伴う献身的愛、優しさは、まさに主イエスの愛、キリストの愛で人々に接したのです。そしてこのパウロの姿勢は生涯、首尾一貫して変わりませんでした。彼の生涯を考える時に、人の人格まで変える神の愛の力に感謝せずにはおれません。クリスチャンを追いかけまわし、迫害し、滅ぼそうとしていたあの迫害者パウロを神はこれほどまで愛の人と創り変えてくださったのです。

## ②自給伝道

**【2:9 兄弟たち。あなたがたは私たちの労苦と辛苦を覚えているでしょう。私たちは、あなたがたのだれにも負担をかけないように、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました。**

**2:10 また、信者であるあなたがたに対して、私たちが敬虔に、正しく、また責められるところがないようにふるまったことについては、あなたがたが証人であり、神もまた証人です。】**

7節の使徒としての権威とは何でしょうか。1コリ9：3～6にはパウロが批判者たちに三つの使徒の権利を逆説的に記している箇所があります。

**【9:4 私たちには食べたり飲んだりする権利がないのですか。**

**9:5 私たちには、ほかの使徒たち、主の兄弟たちや、ケファのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのですか。**

**9:6 あるいは、私とバルナバだけには、生活のために働かなくてもよいという権利がないのですか。**

**9:14 同じように主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活の支えを得るように定めておられます。】**

### 1. 食べたり飲んだりする権利

初代教会でもユダヤ教でも、巡回伝道者（ラビ）はとても重んじられ、手厚い待遇を受けました。それは、旧約聖書でも、また主イエスご自身の教えの中にも、神のみ言葉に仕える祭司やレビ人、また弟子たち使徒たちは、霊的な務めと責任を担い、人の魂のための働

きをするのであるから、彼らが自らの体を支えるための肉の糧を、その務めの報酬として受け取ることは、当然のことであり神のみ心であるという教えが数多くあるからです。

## 2. 信者である妻を連れて歩く権利

また、巡回伝道者は妻と一緒に旅行するので、信徒たちは妻の生活の配慮をすることも当然と考えられていました。ケファ、つまりペトロは、十二弟子のリーダーであり、またエルサレム教会のリーダーでもありましたので、彼の行動は使徒の手本と見られていたようです。ペテロや他の使徒たちが妻と一緒に旅行し、また各地でもてなしを受けていたようでした。それに比べて、パウロは妻を連れていません。パウロは一生独身だったと考えられています。

## 3. 生活のために働かなくてもよいという権利

パウロは他の使徒たちとは違っていました。特に、使徒としての報酬をパウロは受け取りませんでした。使徒バルナバもそうであったと書かれています。ユダヤ人の父親は子どもに実際的な仕事を教える義務があり、律法の学びは実際の労働と共になされるように勧められていました。パウロの職業は天幕づくりです。パウロは天幕づくりの仕事をし、自分の生活費は自分で手に入れていました。パウロはこのことを他の手紙でも何度か触れています。

I テサロニケ 2 章 7 節で記されている「**使徒としての権威**」とは生活のために働かなくてもよい権利でしょう。パウロたちがテサロニケ宣教した時の生活は、決して楽なものではありませんでした。「**2:9 兄弟たち。あなたがたは私たちの労苦と辛苦を覚えているでしょう。私たちは、あなたがたのだれにも負担をかけないように、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました。**」と言っていますが、自給伝道はパウロの伝道に一貫している特徴であったと言ってよいようです。パウロは、なぜこのように自分を苦しめながら福音を宣べ伝えていたのかと言いますと、一つには、彼が金銭目的のために宣教しているという誤解を与えないためでした。また、福音が純粹に、また無代価で人々に届くためでした。パウロは主イエスの御名と福音のメッセージが軽んじられることがないように、また良い模範になるように細心の注意を払いながら宣教しました。ですから「**私たちが敬虔に、正しく、また責められるところがないようにふるまったことについては、あなたがたが証人であり、神もまた証人です。**」とすることができたのです。

【補足】 ピリピ教会からは実際的な助けがあったことがわかっています。

【**4:15** ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおりに、福音を伝え始めたころ、私がマケドニアを出たときに、物をやり取りして私の働きに関わってくれた教会はあなたがただけで、ほかにはありませんでした。

4:16 テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは私の必要のために、一度ならず二度までも物を送ってくれました。】

### ③父親のように

【2:11 また、あなたがたが知っているとおりに、私たちは自分の子どもに向かう父親のように、あなたがた一人ひとりに、

2:12 ご自分の御国と栄光にあずかるようにと召してくださる神にふさわしく歩むよう、勧め、励まし、厳かに命じました。】

パウロのテサロニケでの宣教は単に公衆の面前で公に教えたばかりではなく、個人的かつ具体的にひとりひとりの信仰をケアしたことがこの御言葉からわかります。これもテサロニケに限らず、パウロの宣教活動全体の特徴と言えます。つまりパウロは、主を信じた人々に対して、牧会者として、母親のように優しく振る舞うばかりでなく、父親のように正しく教え、導きました。

ユダヤ人の父親は子供に仕事を継承します。そして仕事を教えながら、律法も学びます。仕事場が律法を学ぶ教室でもあったのです。パウロは天幕を作る職人でした。おそらく平日はテサロニケの人々に天幕作りをしながら、安息日にはシナゴグで父親のように教えたのでしょう。

パウロはテサロニケ教会の兄弟姉妹たちの信仰がぐらつかないように、クリスチャンはやがて神の国に召され、その御国において栄光に輝くものにさえるという、素晴らしい将来が約束されています。このような恵みを用意してくださっている神にふさわしく生活するように、勧め、励まし、厳かに命じているのです。

## 2. テサロニケの人々の受け入れ方

### ①信じる者に働く神の力

【2:13 こういうわけで、私たちもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。

2:14 兄弟たち。あなたがたはユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会に倣う者となりました。彼らがユダヤ人たちに苦しめられたように、あなたがたも自分の同胞に苦しめられたからです。】

パウロはどんな場合にも、感謝すべきことを見出しています。感謝こそがクリスチャンの特徴です。パウロが感謝している内容は何かといいますと、パウロが述べ伝えたメッセージを、聞いたテサロニケの人々が、神の言葉として受け入れたと言うことです。ここでパ

ウロが語っている事は、説教（メッセージ）についての極めて重要な真理です。それは、説教の権威ということです。一般的に説教に対する理解は2つの極端な考え方によって代表されていると言って良いかと思います。その1つは、説教は神の言葉である聖書についての説教者の証言なのだという理解です。この考え方は説教を人間の信仰告白と考え、説教者の自由裁量を大幅に認め、説教者の個人的意見とまでは言わないまでも、人間の1つの考えとして捉える考え方です。これに対してもう一つの極端な考え方は、1566年に作られた第二スイス信条によって代表されるものです。それは、「この神の言葉が今教会において、正当にめされた説教者によって説教される時、我々は神の言葉そのものが説教されていると信じる。」と言うものです。前者にあつては、説教における権威と言うものが見落とされ、後者によっては人間の弱さ、誤りやすさが見落とされてしまっています。

説教（メッセージ）は、弱さをもった、誤りやすい人間によってなされるものですから、どんなに祈りによって準備がなされ、最大の努力が払われたとしても、誤りから完全に守られることはできません。また説教者の主観が入ることは避けることはできません。それにもかかわらず、説教には権威があります。ただ単なる人間の発表や講義ではありません。そこには神の権威が伴います。その神の権威はどのようにして与えられるものなのでしょうか。それは、その語られた説教が、神の言葉である聖書の教理と一致するときにおいてです。説教を聞く側から言えば、ただ説教を盲信すれば良いものではありません。パウロはテサロニケの人たちが盲目に従ったことを称賛しているわけではありません。そのことはパウロがテサロニケの後、ベレアへ行った時、そこの人々の態度が賞賛されることによってもわかります。彼らが賞賛を受けているのは、彼らがパウロのメッセージを盲従したからなのではなく、むしろそのメッセージが旧約聖書の教理と一致しているかどうかを毎日調べたことによりました。

それでは、テサロニケの人々は、パウロの語ったメッセージを「人間の**ことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れた**」とは、どういうことなのでしょう。彼らもベレアの人々と同じであつたに違いありません。旧約聖書に預言として語られ、今それを使徒的宣教としてまとめられたメッセージこそ、神よりのものでありました。

私たちは、ここで1つの疑問にぶつかります。それは、説教を聞く者が、一方においてはそれを受け入れようと言う態度を必要としながら、もう一方においては、それが本当に聖書の教理に合致しているかどうか、批判の目を持って聞かなければならないとしたら、この両者はお互いに衝突して両立は困難ではないかということです。しかし、私たちが説教を聞く場合に必要とされるものは、この両方であつて、決してその一方だけなのではありません。もしも批判の目だけをもって説教を聞いていたとしたら、どんなに素晴らしい神のメッセージも決してその人の心に達しないでしょう。もし批判を欠いていたとしたらどんなに間違つたことが語られたとしても、それを盲従しなければならないでしょう。

主イエスは弟子たちを宣教に派遣するときこうおっしゃいました。

**【マタイ 10:16 いいですか。わたしは狼の中に羊を送り出すようにして、あなたがたを遣わします。ですから、蛇のように賢く、鳩のように素直でありなさい。】**

ここで使われている「賢い」という言葉は「分別がある、注意深い」という意味があります。私たちは、注意深くそして素直に説教に向かい合いたいものです。

この両者が両立するためには、御言葉に親しみ、御言葉に教えられ、養われていて、御言葉が私たちのうちに生きることが必要です。そうすれば御言葉と共鳴しないものが語られた時それをはねつけ、共鳴するものだけを受け入れることができるようになるでしょう。

パウロは、次に重要なことを付け加えています。「この神のことは、信じているあなたがたのうちに働いています。」

神の言葉はそれを受け入れた人の中で働き始めます。神の言葉には驚くべき力があります。その力は、いつも信じる者のうちに働きます。神がその約束の御言葉を信じる者のうちに、約束通りに驚くべきことをしてくださるのです。テサロニケの兄弟姉妹たちは神の超自然的な力によって、生活と人格が造り変えられ、迫害の中にあっても主に従うことができる聖徒たちとなりました。神の言葉の力を体験していたのです。批判したり、受け入れない人は、どんなに頭で理解していても、神の言葉の力がわかりません。その力を知るには、信じ受け入れることが必要です。

**【2:14 兄弟たち。あなたがたはユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会に倣う者となりました。彼らがユダヤ人たちに苦しめられたように、あなたがたも自分の同胞に苦しめられたからです。】**

テサロニケ教会の兄姉妹たちは、この点において、全ての聖徒たちが歩んだ道を歩み始めました。ユダヤのキリスト・イエスにある諸教会は、どんな苦しみを受けたのでしょうか。ユダヤの諸教会は、ユダヤ人信者中心の教会でした。彼らは律法に熱心な同胞たちによって迫害されました。それと同じようにテサロニケの信者たちも同国人から苦しめられるようになっていきます。主イエスを信じて歩む道は必ずしも平坦な道ではありません。私たちも試練に遭った時には信仰の先輩たちがどのように歩んだか思い出し、勇気をいただきましょう。クリスチャンが試練に遭うのは異常なことではなく、むしろそれが普通なのだということを心にとめておきましょう。

## ②ユダヤ人の罪

**【2:15 ユダヤ人たちは、主であるイエスと預言者たちを殺し、私たちに迫害し、神に喜ばれることをせず、すべての人と対立しています。】**

2:16 彼らは、異邦人たちが救われるように私たちが語るのを妨げ、こうしていつも、自分たちの罪が満ちるようにしているのです。しかし、御怒りは彼らの上に臨んで極みに達しています。】

主イエスを否定し、今また使徒たちを迫害しているユダヤ人たちは、旧約においては、メシアであるイエスを預言した預言者たちを殺しました。神が全人類に与えて下さっている唯一の救いの道である主イエスの福音を妨害するユダヤ人は全世界のすべての人の敵となっていました。こうして彼らは罪を満たしつつあるのです。やがて彼らの裁かれる日がやってきます。

パウロは、福音宣教を妨害するユダヤ人たちを厳しく責めています。しかしパウロの心には同時に大きな痛みと悲しみがありました。彼はユダヤ人が救われるためなら、自分はいのちの書から名が消されてもよいとまで宣言していた人です。そしてイスラエルがやがて民族的な救いを体験することを固く信じていました。（ローマ9～11章）

#### 適応

- ① 私たちは福音を宣べ伝えたいと思っている相手がいます。まずその人を愛することができるよう祈りましょう。愛がなければ福音は伝わりません。そしてパウロがそうであったように、母のような優しさと父のような厳しさのバランス身につけさせていきましょう。
- ② 私たちは、礼拝メッセージを飢え渇きをもって素直な心で聞くと同時に、注意深く聖書の教理と共鳴しているかを吟味しましょう。そのために毎日御言葉に親しみ、養われましょう。
- ③ パウロが同胞を見るときに、大きな痛みと悲しみを抱えていたように、日本の霊的現状を見るときに私たちは憂いを覚えます。しかし絶望してはいけません。神が日本を憐れんでくださって収穫の時が来ることを信じて祈り、福音を語りましょう。